聖霊降臨後第13主日（特定19）説教　2011/9/11

聖マタイ福音書第18章21節～35節
於：聖パウロ教会　司祭　山口千寿

今日の福音は赦しがテーマです。先週は教会の仲間である兄弟が罪を犯した場合に、どのように対処すべきかという問題を巡って、大変厳しく処置することが述べられていました。つまり、悔い改めるために3回の機会が与えられますが、それでも教会の言うことを聞き入れなければ破門しなさいと、教会の交わりから除名するよう指示されていました。ところがそれとは打って変わって、今日の福音では兄弟を心から赦すことが勧められています。

ペトロがイエスさまに質問をするところから始まります。教会の仲間が自分に対して罪を犯したら、何回赦したらよいのでしょうかと尋ねます。ペトロの問いは、赦しには限度があるということが、前提となっています。

当時、ユダヤ教のラビも3度まで赦すことを教えたといわれています。ですからペトロとしては、ラビが教える回数よりも倍以上に赦すのですから、十分すぎるほどに我慢を重ね、忍耐強く振る舞ったということになります。7回も赦したなら、もうそれで十分だ。8回目はついに堪忍袋の緒が切れたとしても、誰からも非難されることはないだろう。むしろ、よくぞそこまで我慢したね、と人がほめてくれるだろうというのが、ペトロの考えです。

何故、ペトロはそのように考えたのでしょうか。誰かが自分に対して罪を犯す。そうすると、自分はその罪の被害者だ、犠牲者だ、そのように感じるからです。わたしたちは、自分が害を受けるということについては、実に敏感です。経済的な損害についてもそうでしょう。不正を働く人がいて、その被害をまともに受けてしまったような場合は、自分がいかに大きな損失を被ったか、言い募って止むことがありません。社会的な公正が行われずに、その犠牲になったような時にも、どれだけ自分の権利が損なわれたか、声を大きくして訴えなければ、我慢できないのです。誰かに精神的に傷つけられてみてご覧なさい。その恨みつらみは心の中から消えることなく、どこまでも抱き続けることになるのです。その犠牲に耐えること、我慢すること、それがわたしたち人間の考える赦しなのです。

イエスさまは、7回を70倍するまで赦しなさいと、赦しとは無限のこと、限りのないことだと仰いました。驚くべきことです。ペトロと同じように、赦しということを捕らえていたとしたならば、イエスさまの仰る無限の赦しなど、人間にはとても不可能なことだと、初めから諦めざるを得ないことになります。

イエスさまは、ペトロとは全く異なる捉え方をなさったから、限りなく赦すことを教えられました。今日のたとえ話は、その赦しを語っています。

一人の家来が、王に莫大な借金を負っています。その金額は、1万タラントンです。それを分かりやすくするために、「1兆円」と訳している聖書があります（本田神父訳）。つまり、これは返済することが不可能な金額だということです。この家来は、それだけの負債を負っているのです。王は、持ち物も妻も子どもも全部売り払って、返済することを命じます。それに対して、家来は、必ず返しますからもう暫くお待ち下さいと、ひれ伏し拝みながら哀願します。

その姿を見て、王は、それでは暫く待ってやろう、と言ったのではないのです。半分に負けてやるから残りは速やかに返せと提案したのでもありません。すべてを帳消しにしてやったのです。棒引きにしてやったのです。

何故でしょうか。家来の、その場限りの言い逃れを信じたからでしょうか。違います。王は、家来を憐れに思ったからです。深く憐れみを感じたからです。腸（はらわた）がちぎれる想いがしたからです。突き動かされたからです。他に理由はありません。ただ、その一点にのみ、よるのです。

負債をすべて帳消しにしてもらった家来が出ていくと、自分がお金を貸していた仲間に出くわします。その金額は100デナリオン、本田神父訳では「50万円」となっています。自分が赦された1兆円に較べれば、僅か50万円です。そのお金を取り立てるために、相手の首を絞め、自分がつい今し方、同じように哀願してきたことも忘れ、仲間の願いの言葉に耳を貸すこともせず、牢屋にぶち込んでしまったというのです。

何というむごい、無慈悲な仕打ちでしょう。相手のために心を動かすなどということはないのです。仲間たちは、その成り行きに「非常に心を痛めた」とありますが、この家来は、

自分の僅かの損害にしか、関心が向かないのです。仲間としての絆になど、全く目が向かないのです。何処かで聞いたような話です。

王が、家来の莫大な借金を赦してやったのは、この家来のことを慈しんで哀れに思ったからです。莫大な負債よりも、その家来との間にある絆を、何よりも大事にすることを望んだからです。その借金のために、家来が滅びることを望まなかったからです。

このたとえが語るように、神さまは人間一人一人との関係の回復を望んでおられるのです。そのため、罪の赦しを何よりも優先してくださったのです。わたしたち一人一人が、滅びることなく、神さまとの結びつきの中で生きることができるようにしてくださったのです。そのようにして、一人の罪人が悔い改めて、失われた関係が回復されるときに、天においては大きな喜びがある(ルカ15:7)と、イエスさまは仰ってくださるのです。

もし、神さまが正義を全うされようとしたら、どのようなことになったでしょうか。神さまの怒りの前に、誰一人として生きながらえることはできません。それでは、神さまは、人間一人一人を御自分との交わりの中に迎え入れるために、その喜びを獲得なさるために、ご自身の正義を曲げられたのでしょうか。そうではありません。わたしたちの負い目を帳消しにするために、ご自分の独り子を十字架の死に渡されるという仕方でもって、愛と正義を貫かれたのです。

わたしたちは、この無慈悲な家来にように、自分が赦されている、自分では負いきれない1兆円の罪が帳消しにされているということには、極めて鈍感です。何が罪であるかということについてすら、よく分かっていないというのが、わたしたちのありのままの姿ではないでしょうか。そのくせ、僅かな較べようもない他人の罪、50万円の罪には、神経をピリピリ尖らせるのです。

さて、マタイは先週は、罪を犯し、教会の忠告を聞き入れない兄弟は除名しなさいと言いました。これは、法的な処置を大事にしなさいということです。法に基づいて正義が貫かれることを求めています。そして今日は、神さまの大きな赦しの愛に基づいて、仲間同士の間でも、赦し合うこと、愛し合うことを求めています。

わたしたちは、教会生活の現実の中で、この2つの事柄の板挟みにあって、しばしば悩み苦しむことに直面します。このような現実の問題を、どのように解決したら良いのでしょうか。マタイ福音書は、その答をどのように与えてくれているのでしょうか。

今日の福音書は、マタイ18章の「教会生活についての説教」の締めくくりの部分に当たります。ですから、マタイがもっとも強調しようとしているのは、赦しということだと理解できると思います。赦しという神さまのお恵みの中にわたしたちが立つときに、人間同士の間に於いても、神さまの赦しのみ業が起こることを祈り求めなくてはなりません。

また、愛と赦しの前には、法が曲げられたり、正義が損なわれるようなことが起こることもやむを得ない、ということを言っているのではありません。法も正義も、同じように大切にされていかなければならないことも教えています。その両方が、同時に、教会生活の現実の中で、成り立つような答を、マタイが用意しているわけではありません。誰もが納得できるような形の答を与えている、ということではありません。

愛と赦し、そして法と正義という、現実生活の中ではしばしば相矛盾する事柄に、マタイの教会も思い悩んできたということだと思います。どちらかを取って、もう一方を切り捨てるとか、無理矢理に強引な解釈をして、疑問を力ずくで押さえつけるということを、マタイはしていないのです。現実の問題に直面して、マタイの教会の人々が思い悩んだ姿が、ここには率直に表されているということだと思います。

それは、言い換えれば、わたしたちにも、思い悩むことを求めているということです。簡単に結論を出して、その答えに従って物事を処理していけるならば、それは楽な道に違いありません。しかし、そうではなくて、一つ一つの実際の出来事にぶつかって、そのときそのときの結論を得ていくことを大切にしていくというのが、マタイの姿勢のように思われます。

パウロ教会も、ここ数年、この相矛盾する問題に直面して頭を悩ましてきました。しかし、問題の解決を目指すためにわたしたちが執るべき姿勢の根本には、わたしたちが神さまの赦しの恵みの中にあるという感謝の心を忘れてはならないと思います。そのために、もうしばらくは悩み続けなければならないでしょう。

しかしその歩みの中で、わたしたちにもイエスさまの十字架の出来事の意義が、よりはっきりと分からせていただけるようになるのではないでしょうか。

今日は、信仰生活は、自分の十字架を負ってイエスさまに従っていくことであることを改めて思い起こし、そのための力と深い洞察が与えられるようにお祈りしたいと思います。